

第2章 大連日本人社会における「華中・華南」情報 ——総合雑誌『満蒙』を事例として

松重 充浩

はじめに

戦前期日本の「華中・華南」認識は如何に形成されていったのであろうか。この点の実証的再構成において、当該期の日本が「帝国」的規模で展開していた事実をふまえれば、日本国内のみならず、所謂「外地」の日本人社会における対外認識の把握も実証的作業課題の一つとなることは言うまでもあるまい。

本稿では、この課題を、日本の中国東北地域進出の重要拠点の一つだった大連で最大刊行部数の日本語総合雑誌である『満蒙』⁽¹⁾に、創刊(1920年9月)から満洲事変勃発(31年9月)に至る期間に掲載された、「華中」(江蘇、浙江、安徽、江西、湖北、湖南、四川の各省)と「華南」(福建、広東、広西、貴州、雲南の各省に香港と台湾を含める)に関する記事を事例に検討するものである⁽²⁾。

満洲事変前の『満蒙』の対中国認識の全体像については、既に本稿注1の拙稿で述べた通りであるが、今回、特に「華中」「華南」に対する認識に着目し検討を行うのは、旧稿で中国認識一般としたものの内実が如何なる地域概念から構成されているのかを明らかにしていく作業の一階梯とすることを念頭に置いたものとなっている。それは同時に、当該期大連日本人社会の中国認識において、「華中」「華南」に関する情報が如何なる位置付けを持つものだったのかを追究する一階梯とするものでもある。

1 「華中・華南」情報の量と情報源

創刊から満洲事変に至る迄の『満蒙』(1920年9月から第137冊・1931年9月1

日刊行まで)に掲載された「華中・華南」情報を含む記事の全タイトルは、後掲の「附表：『満蒙』掲載「華中・華南」関係記事一覧」(以下、「附表」と略)に示された通りとなる⁽³⁾。本節では、この「附表」から確認できる、諸特徴を確認し、第2節以降の記事内容に踏み込んだ検討の前提を確保しておくこととした。

(1) 「華中・華南」記事数からみる『満蒙』の特徴

先ず、「華中・華南」に関する記事件数から窺える「華中・華南」情報の特徴を確認することとした。「附表」から確認できる「華中・華南」記事の総数は982件となっている(附表で略した記事も含む)。当該期の『満蒙』全体の総記事数が、6280件であることをふまえると、記事数的に極めて少ないことが分かる(19.8%)。これは、創刊号で「満蒙文化の真相を調査紹介する」(創刊号・1920年9月・11頁。以下、引用文後の括弧内は、特に断らない限り、『満蒙』の掲載号数・刊行年月・頁を指すものとする)と述べられている通り、『満蒙』が当該期の日本で「満蒙」と呼称された地域(概ね中国東北地域と東部内モンゴル地域を指す)⁽⁴⁾の関連記事の掲載に力を入れた雑誌であることを、記事数からも裏付けるものとなっている⁽⁵⁾。また、『満蒙』の読者の関心が「満蒙」に集中し、「華中・華南」への関心が相対的に低かったことを窺わせるものともなっている。それは同時に、『満蒙』の読者が、「満蒙」の事象を、他の地域との関連性の中で位置付けていく視点が弱かったことを窺わせるものでもあった。『満蒙』は、他の地域から相対的に自立させる形での「満蒙」記事を多数掲載させることで「満蒙」の独自性を強く押し出す傾向を持つ雑誌ともなっていたのである。

と同時に、以上の特徴は、掲載された「華中・華南」記事が「満蒙」と関連する内容を含むものだったことを推察させるものともなっている。読者の直接的な関心度が低い「華中・華南」情報をわざわざ掲載するのには、その記事に「満蒙」との関連性の存在が求められたのではないかと考えられるからである。この点は、第2節で改めて検討することとした。

(2) 「華中・華南」記事の形式と情報源について

①記事の形式について

次に、「華中・華南」関係記事が、どのような形式で掲載されているかを確認してみると、1925年前後で大きく様相を異にしていることがわかる。1925年以前においては、「満蒙彙報」や「支那彙報」⁽⁶⁾との項目欄に、「華中・華南」に関連する個別の事実や案件の情報をコンパクトにまとめた所謂「短信」形式で掲載するというものが中心となっていた。同欄は、内外新聞の重要記事から選査したものをテーマ別に分類して掲載したものだったが、1925年以降になると、少なくとも雑誌本体からは「短信」形式の記事が減少し、1926年2月以降は所謂「ファーストハンド」の情報を収集し、これに大連を中心とした経済重要情報を加えた「満蒙情報」欄が新たに開設され⁽⁷⁾、比較的長文な調査論考形式の記事が中心となっていく。これは、単なる編集方針の変化のみならず、1925年前後で、中国東北地域在住日本人における対「華中・華南」認識に何らかの変化、即ち、より詳細な調査・分析に支えられた「華中・華南」情報の必要性が生じていたことを推察させるものとなっていると言えよう。このような必要性は、満蒙文化協会が、1925年前半に「南支那は（中略）産業中心地として、且亦文化色彩ある都市として満洲に直接の聯繫を持つことは此處に申すまでもありません」との認識の下、第2回南支那視察旅行団を組織していたことから確認できよう⁽⁸⁾。在中国東北地域日本人社会において、直接見聞すべき「華中・華南」認識の必要性が喚起されつつあり、『満蒙』誌上の「華中・華南」記事掲載形式の変化は、この状況と連動していたと考えられるのである。

②記事の情報源について

以上の量と形式を持っていた「華中・華南」記事だが、その情報の来源はどこにあったのであろうか。「附表」からは、大きく二つの情報源が確認できる。

一つは、『満鉄調査時報』からの転載（要約や抜粋を含む）に象徴される、南満洲鉄道株式会社（以下、満鉄と略）が調査・収集した情報である⁽⁹⁾。『満蒙』の創刊号には、総務部調査課名で、以下の告知がなされていた。

従来当課に於て発行致居候調査時報は今回滿蒙文化協會の設立を機とし更に之を一般に紹介せしむる目的を以て其原稿全部を挙げて同会会報滿蒙之文化紙上に公表し調査時報は八月限り廃刊することに相成候に付此段謹告候也（「謹告」, 創刊号・1920年9月・46頁）

一時休刊するも『滿鉄調査時報』が実際に廃刊されることはなかったが、『滿蒙』への滿鉄情報転載が滿鉄側の承認下で行われていたことを示す内容となっている。このようなことが可能となった背景には、『滿蒙』の発行社である滿蒙文化協會が事実上の滿鉄傘下にあったことが考えられる⁽¹⁰⁾。『滿蒙』は、滿鉄の調査・収集成果の一部を適宜社会還元する役割を担うこととなっていたのである。では、どのような情報が、『滿鉄調査時報』から『滿蒙』に転載されていたのであろうか。「附表」からは、次の三つの分野からの情報が数多く転載されていることが分かる。別言すれば、以下の三つの分野の情報が、滿鉄を情報源としていたのである。

一つ目は、「近著図書雑誌類重要記事索引」に代表される各種研究成果目録の類いである。これは、滿鉄が収集した様々な雑誌の記事を滿鉄内の分類方法に則して整理・目録化したもので、時々の滿鉄にどのような情報が集まっていたのかを一覧できるものとなっていた⁽¹¹⁾。そこには、当然「華中・華南」も含まれており、読者は、この索引から必要な情報を見つけ出し、滿蒙文化協會を通じて、その閲覧を希望することが可能だった。『滿蒙』は、滿鉄の情報収集力を社会還元していく重要な「窓口」となっていたのである。

二つ目が、前述した「彙報」欄に掲載された、中国各地の新聞切り抜き情報である。極めて広域な中国全土の時事情報を個人が収集することは極めて困難だったことを踏まえると、これも滿鉄の組織的情報収集力の成果を『滿蒙』を「窓口」にして社会還元した事例と言えよう。『滿蒙』購読者の大半を占めた中国東北地域在住の読者は、居ながらにして分野ごとに、あるいは日付順に整理された「華中・華南」情報に接することができたのである。

三つ目が、囑託を含む滿鉄職員らによる調査、研究、翻訳などの成果である。

この領域における『満鉄調査時報』から『満鉄』に転載された記事は、政治、経済、社会、科学、産業など多岐に亘るが、満鉄の施設を利用した実験成果を伴う諸産業分野の成果の転載が相対的に多くなっていることと、政治分野に関しては外国語媒体からの翻訳が多くなっていることなどの特徴が認められる。ここでも、満鉄ならではの施設力やマンパワーが、『満蒙』を通じて一般の日本人社会に還元されていることを確認できる。

では、満鉄と異なるもう一つの情報源は、如何なるものだったのであろうか。それが、現地在住の識者からの寄稿である⁽¹²⁾。八木契三郎(1866-1942)や上田恭輔(1871-1951)に象徴される、日清・日露戦争以来、中国に居住している言わば現地の「古老」とでも称することができる面々は、自らの関心が赴くところを『満蒙』に寄稿していた。彼らの論考は、文化的分野のものが大半を占めており、その内容はともすれば好事家的になりがちだったが、後述するように、現地日本人の「華中・華南」の位置付けを端的に示すものともなっていた。また、1920年代後半からは、佐藤四郎(1909-43)や橘樸などの、「満洲国」期にも活躍する「支那通」らによる、中国国民党や中国共産党の動向など、「華中・華南」政治情勢に関わる論考も増加していた。

2 「華中・華南」情報の内容と特徴

上述した形式と情報源を持つ「華中・華南」関係記事は、具体的にどのような内容を持っていたのであろうか。別言すれば、『満蒙』誌上の「華中・華南」認識はどのような具体的な内容を持っていたのであろうか。本節では、この点を、記事が対象とした分野を大きく三つ(文化、経済、政治)に分けて確認していくこととしたい。

(1) 文化的分野の記事内容

文化的分野の記事における「華中・華南」情報は、都市や地域の個別具体的特徴を抽出あるいは分析するものというより、中国一般(劇、絵画、陶磁器、詩

歌、映画、食、民俗、信仰、女性、等々)の文化的特徴を説明する上での事例の一つとして提示されるものが大半だった(永尾龍造「支那土俗慣習研究(六)」第15冊・1922年11月・58-71頁、等々)。文化的分野の記事の大半は、前述した「識者」により作成されており、そこでの「華中・華南」情報は文献からの抜粋という形式のみならず、旅行をはじめとした自らの実体験からの事例摘出という形式もとられており(竹本吉二「南支那飛脚行脚」第62冊・1925年・123-137頁、朴庵「南支那の旅から」第83冊・1927年・105-119頁、山口慎一「支那映画界の現状」第93冊・1928年・122-130頁、等々)、記事全体としては「華中・華南」各地における個別の諸事象を言わば「摘まみ食い」する形で中国文化の一般的特徴を再構成するという内容となっていた。

このことは、「華中・華南」の諸事象が中国文化の全体的「一般性」を構成する上で重要な一部と見なされていたことを示すと同時に、その全体的「一般性」と地域的特性を如何に整合的に位置付けるのかという課題を喚起させるものでもあった。とりわけ、前述したように「満蒙」の自立性を強く押し出していく編集方針を持っていた『満蒙』にあっては、全体的「一般性」と地域的特性とを如何に整合的に位置付けるかは、重要な課題となるものだったと考えられる。別言すれば、「中国の中の『満蒙』」と「中国とは異なる『満蒙』」を如何に整合的に位置付けるのが、問われていたのである⁽¹³⁾。

しかし、実際の『満蒙』掲載記事では、この点が深く掘り下げられることはなかった。「満蒙」での日中合辦事業の実践を分析する記事で、パートナーとなる中国人の特徴を現地ならではの特性からも検討すべきところを、ステレオタイプ的な中国人一般の特徴からの検討に終始していたことに象徴されるように(満鉄調査課「満洲に於ける合辦事業の現状」第28冊・1922年12月・11-12頁)、全体的「一般性」と地域的特殊性の関係は曖昧なまま一つの記事にまとめられていたのである。

そして、この全体的「一般性」と地域的特殊性の関係を曖昧にしたまま全体的「一般性」を構築する手法を利用して、「南方」(実質的には「華中」)の文化的特徴を導出していると推察されるのが、辻聴花「支那の南と北」(第22冊・1922

年6月・49-56頁、第23冊・1922年7月・55-59頁)だった。その内容を整理したものが「表II-2-1 天・地・人・産物から見た南と北」であるが、ここからは、当該期のステレオタイプの南方と北方に関する「満蒙」在住日本人の認識を見て取ることができる。そして、この認識を与件として、「満蒙」在住の日本人が華中を旅する中で以下のような意識が喚起され、ステレオタイプの「華中・華南」認識が再生産されることとなっていたのである。

南支那と云へば直ぐ聯想さるゝ水辺の楊柳、運河、石造の高い橋、水牛と子供、それ等が打ち続く菜の花の間に点出して遠く寺廟の塔が絵の様に浮かび出る。(竹本吉二「南支那飛脚往来」第62冊・1925年6月・128頁)

(2) 経済的分野の記事内容

『満蒙』に最も多く掲載されている「華中・華南」関係記事の分野は、「附表」を一瞥して分かる通り、経済関係記事だった。この経済関係記事の内容には、以下の特徴があった。

即ち、華中とりわけ上海において展開する経済活動に関する記事が極めて多いということである。そのなかでも、金融関係記事が多数を占めていた。「短信」形式の記事では銀行等の具体的活動事実が記載されるに止まり、何らかの論評が加えられることは少ないが、1925年以降増加する長文論攷では、上海の金融事情が実際の為替取引のあり方や数的データと共に提示されている(木下修一「大連銀市場変遷の跡を回顧して」[第92冊・1927年・96-98頁]、南郷龍音「満鉄の上海向送金方法と社内為替に就いて」[第92冊・1927年・99-102頁])。そこには、「大連市場を知らんと欲せば先ず上海市場を語らねばならぬ」(木下修一前掲記事、98頁)との記述に象徴される、中国東北地域に強い影響を与える地域としての「華中・華南」認識を見て取ることができる。この中国東北地域に強い影響力を持つ「華中・華南」という認識は、金融に止まらず、財政政策を含む他の経済関連活動を伝える記事からも確認することができる(中濱義久「上海に於ける不当課税問題」[第89冊・1927年・23-35頁])⁽¹⁴⁾。そこには、金融同様、中国東北地域経済に大きな影響を与えるものとして「華中・華南」の経済状況あるいは財政政

策が位置付けられていたことを確認できる。それは同時に、中国東北地域在住日本人にとって、自らの経済的基盤が「華中・華南」と連鎖する中で形成されている客観的事実を突きつけるものともなっていたのである⁽¹⁵⁾。

(3) 政治的分野の記事内容

政治的分野の記事は、1925年以前は、主に前述した「短信」形式で掲載されていたが、その内容は経済の記事同様、中国東北地域政治に影響を与える可能性がある内容が中心となっていた。具体的には、張作霖地方政権の中央政府への人事的干渉や軍事的進出に繋がりがかねない「華中・華南」の動向、連省自治・省憲法などの地方統治に関わる「華中・華南」の政治思潮に関する記事が大半を占めていた（『民国最近時事：浙督盧永祥と聯省自治』第12冊・1921年・68頁、『支那彙報：南支各省政情』第43冊・1924年・76頁等）。この傾向は、満洲事変まで一貫するものではあったが、1925年以降、新たな傾向が顕在化していく。それが、「華中・華南」の政治的動向を「満蒙」の排外主義やナショナリズムを内包した「赤化」と関連づける記事の増加だった。

その契機となった事件が、1925年の「五・三〇事件」だった。これは、同事件と奉天省で発生していた中国人労働者による罷業を関連づけて、華中の労働運動の「満蒙」伝播（＝「赤化」とみなしたものだった。但し、この段階の『満蒙』の論調は、張作霖地方政府の「関内」軍事進出により中国東北地域の事実上の主要紙幣となっていた奉天票が乱発され、その価値が急落したことによる単純な「経済闘争」であることが指摘されるなど事態を冷静に受け止めるものとなっていた（佐藤四郎「満蒙大勢：上海事件の考察と新時代に入らんとする支那の国際関係」第63冊・1925年・67-70頁、本協会調査「満蒙情報」第72冊・1926年4月・88-90頁）。これが「赤化」を強調する論調へと変化し始めるのが、1925年11月に起こった「郭松齡事件」だった。同事件が、奉天軍の華中進出を契機として生じ、郭松齡自身の思想とは別に、同事件の背景にソ連の援助があったとする記事が掲載され（鉄仮面「郭松齡の叛乱と今後の東三省」第70冊・1926年2月・24-51頁）、「華中・華南」の動向が「赤化」と間接的にせよ結びつけられることとなってい

た。この傾向が明確化するのが、国民政府による北伐が進展する過程だった。「華中・華南」で展開する国民党や共産党の活動がソ連の影響如何と共に示され（張維周「広東国民党の由来とその目的」[第84冊・1927年4月・26-32頁]、橘樸「中国共産党と労農政権」[第95冊・1928年3月・2-23頁]）、「現時長江以南に勢力を揮ふ国民革命政府こそ、共産党の化身で、此共産党は露国共産党に飼はるゝ走狗である」（淮汀「支那の現政局」第84冊・1927年4月・33-34頁）との認識を生んでいた。加えて、この状況に並行して、福島紡績での中国人労働者のストライキも含めて、「満蒙」における中国人の労働運動にも「華中・華南」からの「赤化」の影響が認められることとなっていた（橘樸「支那労働運動と南満洲」第80冊・1926年12月・2-17頁）。「赤化」のナショナリズムの側面に着目すれば「揚子江以南の支那人と比べて著しい濃淡の差があるとは云へ、満洲土人の間に最近国家意識の湧出して来たことを否定するわけにはゆくまい」（朴庵「在満邦人の支那及満洲論策批判」第86冊・1927年6月・42頁）との状況が生まれつつあったのである。

この状況の現出は、「満蒙」における既得権益維持と「赤化」を防ぐことを現地日本人の重要使命と認識していた日本側にとって、「華中・華南」の政治的状況が、中国東北地域と共存できない方向性を持ちつつあるとの認識を生むこととなっていた。別言すれば、1925年以降、とりわけ中国国民党・国民政府の台頭以降、「華中・華南」が、中国東北地域を不安定化させる要因をもたらしかねない地域となりつつあるとの認識が喚起されつつあったのである⁽¹⁶⁾。

もちろん、中国東北地域に影響を与える「華中・華南」の政治状況の全てが、「満蒙」に不安定さをもたらすものではなく、1922年段階では、「華中・華南」の学生を、日本はもとより国際的な共通課題を持つ「新しき民族的自覚」に進みつつある存在と見なすなど、連携の可能性を持つ対象とみなす認識も存在した（「巻頭言：現代支那の不安」[第21冊・1922年5月・7頁]）。また、「江浙の地が支那に於ける人文の最も進んだ土地であり、江浙人士は最も進歩的である」（大矢信彦「支那時局私観」第51冊・1924年10月・4-5頁）といったような「華中・華南」を中国における先進地域と位置付けた上で、同地域で生じている「国民革命」の潮流を、「軍閥」解体の必然性を示すものとして理解し、「満蒙」もその埒外

にあることは出来ないとの認識も存在していた（園田一亀「奉天軍閥の勢力消長観」第81冊・1927年1月・43-50頁）。更に、「華中・華南」で展開する政治権力の階級的基盤の検討も積極的に行われていた（橘樸「上海資本家階級の動態的考察」第114冊・1929年10月・2-18頁、「同前」第115冊・1929年11月・17-35頁等）。加えて、「統一過程にある更新支那の理論と現実との矛盾より来る過渡的苦悩」に直面する張学良地方政府への理解を示したり（船橋半山楼「理論と現実とに悩む東北政団——張学良氏帰奉後に於ける北支東北の局勢種々相——」第131冊・1931年3月・15頁）、国民政府の経済建設を評価する論調も存在した（井村薫雄「新中国の六年計画」第135冊・1931年7月・2-13頁、「同前」第136冊・1931年8月・18-27頁）。「華中・華南」の影響を選択的に受け入れる可能性も示されていたのである。しかし、このような認識は、1923年の旅大回収運動、前述した1925年の「五・三〇事件」や「郭松齡事件」を契機とした一連の展開の中で主要な論調となることはなかった⁽¹⁷⁾。この状況の下、1927年段階に入ると中国東北地域に「動揺」をもたらす策源地としての「華中・華南」という位置付けが定着しつつあったのである（橘樸「南支那暴動の理論及実際」第94冊・1928年・2-17頁）。

おわりに

『満蒙』における「華中・華南」情報は、中国東北地域との関連性を有する「短信」情報を主要形態とする政治・経済情報を基軸にしつつ、現地識者からの学術的文化情報が適宜加わる形で、蓄積されていた。それは一見、単純なファクトが積み重ねられて行くかの様相を、そしてその意味で、ニュートラルな対中国認識形成に資する情報が蓄積されていくかの様相を呈するものだった。

しかし、「短信」の大半は、現地日本側利害と直接関連し得る内容が選択的に提示されており、それゆえ、それを読む日本人側が単なる事実止まらない、現地日本人側の利害と願望も併せて「読み込んで」いたであろうことは、容易に想像がつく。現地日本人（主に商工業者）は、様々な事実から導出される「満蒙」と「華中・華南」（特に上海）の連関性の強さと、1920年代に入り顕著とな

る日本側商工業者の後退と、それに連動するかのように映る現地中国人商工業者の台頭とを連関させつつ、「短信」をはじめとする「華中・華南」記事を読んでいたと考えられるのである。

この状況の中で、1920年代中盤から顕在化する「華中・華南」発の学生運動や労働運動の情報は、「郭松齡事件」に象徴される「国民革命」の東北波及認識とも相まって、「華中・華南」が「満蒙」の現状を更に悪化させる要因をもたらす策源地であるとの位置付けを現地日本人社会側に付与するものとなっていた。

それは同時に、「華中・華南」（そして「華北」からも）との強い経済的な連関性があるにも関わらず、少なくとも政治的・文化的には「自立」した「満蒙」社会建設の必要性を希求する認識空間構築に寄与するものでもあった。事実、1920年後半には「満蒙は支那の領土となっている居るが、その歴史的事実と地理的關係から云へば、支那本土とは切離して考ふべき特別の地域で、我国の満蒙に於ける特殊の關係から申しても、満蒙問題を支那本部の問題と一緒に視るのは謬まつて居る」（山田武吉「満蒙問題に対する主張」第87冊・1927年7月・27頁）との認識や「馬賊の被害、匪類の横行、甚だしきは彼の郭松齡事件の如き事件の起こった事実を鑑みても、満蒙における我が政治的特権をもつと強める必要があると云へる。是等の時事は同時に軍事的特権の必要を雄弁に物語つてゐる」（同前25頁）との認識が披瀝され、1928年に結成される満洲青年連盟は、「満洲」と上海に象徴される「関内」との間で不可分的に形成されていた経済的連鎖の現実を等閑視しつつ、「満洲」の政治的・文化的「自立」と日本側既得権益に対する国家による強力な保護・育成を声高に主張し、活動を開始していた⁽¹⁸⁾。「華中・華南」情報は、中国東北地域の日本人社会においては、結果として、満洲事変勃発・満洲国建国の起動因の一つとなりつつあったのである。

表II-2-1 天・地・人・産物から見た南と北

	南	北	
天	・ 空気の具合	常に極めて湿つてゐる、北方で気管や肺を傷め易いのと正反対に、南では余程注意しないとマラリヤや脚気に罹り易い。	至つて乾燥。
	・ 空の色	丁度一枚のペールを掛けて眺めるやうに、どうしてもハッキリしないで、少しボンヤリとして見江(え)る。	清く綺麗に澄み切つてゐる。
	・ 蒙古風	月の色も、北地で眺めるやうに、キラキラと冴江(え)互つていることは少なく、日本でいはゞ春の夜の朧月のやうなことが多い、北の星のやうには、余りにキラキラしてはゐない。遠くに少ボンヤリと見江(え)る。	北の空色の一特色、毎年三四月頃、空一面が黄塵漠々たる世界、一種の奇観。
	・ 月と星	月の色も、北地で眺めるやうに、キラキラと冴江(え)互つていることは少なく、日本でいはゞ春の夜の朧月のやうなことが多い、北の星のやうには、余りにキラキラしてはゐない。遠くに少ボンヤリと見江(え)る。	非常に綺麗、凛々としてゐてはば男性的美を十分に發揮してゐる。
	・ 風と雨	風も吹き易い、雨は北地とは、正反対に、ナカナカ降る。	割合に吹くことが少ない。滅多に降らない。
	・ 露と霜雪	この三者は、北方とは非常に違つて、何も多い。	露は至つて浮かない。霜は降ることが至つて稀。雪は降ることは降る。だが矢張空気の関係で深くは降らない。
	・ 一般の時候	南の時候は、北と余程異つてゐて、温暖である。	北は南と比較すると、寒さは随分違ふけれども日本の内地などから想像してゐるよりは、北地の温度は、格別烈しいことはなく、支那人は防寒具に富んでゐて、道行く人も、皆飛行機乗り擬ひの武装的であるから、何でも無いが、我々日本人などには、少々応へる。けれども蒙古や北滿や、所謂朔北の寒氣と較ぶると、非常な暖かみであるさうで、日本人でも元氣を出して居りさへすれば、北京や天津などの寒さは、何のことはない。
地	・ 土と地味	北の土が概して黄色であるのに対して南の土は余程黒色を帯んでゐる。そして粘着質を持つてゐるから雨後に歩く時などは余程注意せなくては滑り易い。	素人眼から見ていふと、北の土は概して黄色である。土の黄色であるのは、北の建物物や、その他の色彩と対照して、余程調和してゐて面白く見江(え)る。

地	<ul style="list-style-type: none"> ・山 ・川 ・湖水と沼 ・植物 ・動物 ・鉱物 ・道路 ・一般の風景 	<p>山の形は丸みがつたのが多く北の山のやうに突屹と頑固に削つたやうに尖つてゐるには殆んど無い。</p> <p>南には川は非常に多い。</p> <p>南には湖水や沼澤は非常に多い。</p> <p>南は気候が暖かく地味が善いので植物の繁殖は至つて宜しい。</p> <p>普近の鳥は殆んど北方と変らない。特有としては江蘇から浙江にかけては水牛がある野猪がある。</p> <p>鉱物は北方と較ぶると非常に少いやうである。</p> <p>南の道路は北より概して悪い而して其の路幅は非常に狭い。</p> <p>南の風景は一寸水彩画のやうだと前にも云つたが實際其の通りである。南方は北のやうに塵埃が少いので総てものが北のものより清らかで汚れてゐない。</p>	<p>山の形は、南のよりか少し尖つてゐる樹木の少い丈に、岩石が多い。ゴツゴツして突き立つてゐる。南の山のやうに、円くて撫でたやう山は殆んど無い。北には川は少い。南の川は、非常に水量に富んでゐて、運輸の便があるけれども、北のは白河や黄河の一部を除いては、殆んどその利便がない。</p> <p>一種の沼澤は頗る多い。</p> <p>北は気候が寒く、又地味が余り良くないところから、植物の繁殖には、余り良くない。</p> <p>南方と殆んど変わらない。唯蛇類と蛙類は、南方よりか非常に少い。</p> <p>南よりか北の方が余程豊豊である。</p> <p>道路は、北のは南方よりか、割合に善く出来てゐる。</p> <p>概していふが、北の風景は、善くいふと雄壯で男性的であるが、悪くいふと、粗野で殺風景である。又北の風景を一種の油絵といふならば、南のは水彩画である。</p>
人	<ul style="list-style-type: none"> ・身体 ・容貌 ・言語 ・性質 	<p>南人は北人よりか体格が頑丈でない、力を較べても到底北人に及ばない。</p> <p>南人の声音には元來入声もあるので音の種類からいふと北方よりか富んでゐる。</p> <p>柔和で優美で荒々しいことが無い、剛健素樸の風に乏しく、軽佻浮薄の傾きがある、頭脳は北人のやうに少しもボンヤリでなく、敏捷で早判かりがし、何事にも進歩的である、一体に理想を好み自由を愛する物事に余り執著しない、意志は薄弱の方で物に厭き易い。</p>	<p>北人は南人よりか体格が頑丈である身長も高く力もナカナカ強い。</p> <p>北人は南人と比ぶるとユツテリと落ち付いてゐて頬の肉附が豊かである。</p> <p>言語は云ふまでもなく北と南とは非常に異つてゐる即ち北人の声音には入声がないそれで北人の発音には一つも濁声がないので非常に清らかに聞江(え)ハツキリ聞取れる。車夫の言葉でも苦力の話し調子でも南方人に較ぶると非常に上品である。</p> <p>北人は割合に撲実であつて軽佻の風が少い。一体に何事も保守的であつて頭脳が頑固で早判りがしない悪くいふと少し愚鈍の方である其の代りには意志が堅固であつて空論を厭ひ實際を尊び何事にも力行を主として心が軽しく動かない。</p>

		南	北
人	・人情	南人は概して余り濃厚鄭寧の方でない。実際の人情は軽薄で寧ろ冷淡の方である。	北人は割合に鄭寧で手厚い方で南人のやうに軽薄なところが少い。
	・住居	普通の人家は殆んど皆木造で、煉瓦造や、泥土造は至つて少い。	普通の家は木造が非常に少く多くは煉瓦と泥土とで造つてゐる、又二階建といふのは極めて少く。
	・衣服	南人の衣服は余程贅澤である。	色合からいふと至つて濃厚なのがが多く、サツパリした色は余り好まない。北人の好む色合はすべて濃くてジミの方である其仕立方といつても民国以来は南方の風が次第に移つて来て少しづつ、変化いつ、はある。
	・食物	南人は殆んど皆白米の飯を喰べる。南菜は北菜とは余程違つてゐる、割合に砂糖を多く使ふ、又酷味のあるものも多い鹹味の勝つたのは余り多くない。	北人は米飯よりも麵類や饅頭類を好む、同じく米飯にしても白米飯よりか老米飯（多年倉庫に蓄へた旧米）を好む傾きがある。どちらかといふと北の料理は甘味が少く少し鹹味の強く油を多く用ひた方である。
	・嗜好	南人は入浴を非常に好む、だから身体が北人より汚れてゐない、花類を好む程度も北人よりか盛んである。船に乗ることを非常に好み、又芝居を好むことも非常なもの、併し北方のやうに耳で歌を聴くといふよりも、寧ろ眼で劇を観るといふ方が勝つてゐる、酒は焼酒よりか紹興を好むが酒量は概して北人には及ばない。	北人は入浴を好まない、又男子でも余り拭ふことも好まない、北人は概して南人よりか余程汚れてゐる。花類を賞味する程度も北人は南人よりか浅い、其の代りに非常に小鳥や鷹を飼ふことを好む、又少し武ばつた遊びも一般に好む、芝居を観ることは南人よりか尚一層非常に好きで殆んど狂に近い程である、酒を飲むことも北人は南人よりか強く、紹興酒よりか焼酒類を好む。
産物	・米と麦	南は到る処米が産する。	・麦と高粱 北方には麦畑と、高粱畑とは到る処に広漠としてゐる。
	・桑と蚕繭	桑も南には非常に善く出来る。	・羊肉と獣皮骨 羊の牧畜もナカナカ盛んに羊肉販売も非常に旺んである。
	・獣肉と魚鳥肉	獣肉は豚が多く、羊は至つて少く、又味も北方のに及ばない。川魚は北の魚よりか味が好い。	・果物類 北方には果物類は割合に多い。
	・果物と筍	南の果物には北方と殆んど同じく桃もあり、杏もある、其の数類は寧ろ北方よりか多い。南には筍が多く産し。	・白菜と葱 北の白菜は南の白菜よりか味が確かに好い。大葱も立派なのが出来る。

産物	・酒茶と味噌漬	酒は名高い紹興酒が浙江の紹興府から夥しく産出して全国の需用に応ずる。	・玉細工と墨壺	玉の細工は南の蘇州と並んで非常に上手である。白銅製の墨壺は確かに名物の一である、其の花鳥や、山水や、文字の彫刻には極めて風雅で、精緻なのがある。
	・糖蓮と藕粉	蓮池が非常に多く。	・天津の泥人形	天津の泥人形は昔から有名なものである。
	・絹織物類	南方殊に江蘇の蘇州や、浙江の杭州は養蚕の最も盛んな土地だけに絹織物が非常に多く産出し。	・蜜漬棗と乾葡萄	北京の棗の蜜漬は非常に立派で、味がナカナカ好い、又核実なしの乾葡萄も直隸の北端、蒙古に近い処から産するが天下の珍品である。
	・筆と墨	筆と墨とは全く南方の有名な特産である、此の二の品物丈でも支那の文化上に南方が非常に貢献してゐることが証拠立らるゝ。	・酒と味噌漬	俗に黄酒といつて焼酒類ではない、一種の甘味のある酒が出来る、重なる酒は所謂高粱酒であつて、南方の焼酒よりか余程透明で味が良い。
	・紙と扇子	紙も支那から多く産出する、特に浙江と江西とから多く出る、福建からも多く出る。扇も南の名産である。		
	・陶瓷器と人形	陶瓷器も南方から夥しく産出し、泥人形は江蘇の無錫県のが好く、これは天津の泥人形と違つて其の形が小さくそして種々の職業の人形を製つたのが多く。		
	・蘇州の刺繍	南方では蘇州人は非常に手 [?] 利いた方である。		

※辻聴花「支那の南と北」(『満蒙』第22冊, 1922年6月, 49-56頁・『同前』第23冊, 1922年7月, 55-59頁)より作成。

注

- (1) 刊行当初の誌名は『満洲之文化』で、『満蒙』への改称は第33冊(1923年4月)からとなっているが、引用等における煩雑さを避けるために本稿では誌名表記を『満蒙』に統一している。また、同誌の書誌の情報に関しては、拙稿「第一次世界大戦後の大連日本人社会における中国認識：総合雑誌『満蒙』を事例として」[田中仁編『21世紀の東アジアと歴史問題：思索と対話のための政治史論』(京都：法律文化社、2017年)所収]を参照されたい。なお、本論文での底本としては、『復刻版満蒙(全121巻+別冊1)』(東京：不二出版、1993-2003年)を使用した。
- (2) 本稿の「華中」、「華南」の省単位での地域区分は、山本三生編『地理講座：外国編(第二巻)』(改造社、1933年)の記述にある「中支那」と「南支那」を、それぞれ「華中」と「華南」に比定した上で、それに香港と台湾を「華南」に含めたものとなっている。但し、この比定は、後述するように『満蒙』記載用語と齟齬を来す場合もある。なお、浙江省に関して前掲山本編書では、その南部を華南に分類する場合もあるとされるが、本稿では、省域全てを一括して華中に分類している。
- (3) 『満蒙』誌上における「華中」「華南」に対応する地域用語としては、「中支」「中支那」「中部支那」「南支」「南支那」「西南」「南方」「南部支那」が時期を問わず使用されている。このうち、「南支」「南方」「南部」に関しては、上海等の長江流域以南全般を含む形で使用される場合も散見される。これは、「北支」「北支那」「北方」「北部」の対概念として、華北以南の総称として「南支」「南方」「南部」を使用する例と思われるが、本稿(含、附表)では、記事の具体的省・都市を確認した上で、「華中」「華南」の分類を行った。また、省名や都市名が不明な場合は、「華中」「華南」の両属するものとして分類した。
- (4) 「満蒙」の地理用語的使用に関する歴史的位置付けに関しては、中見立夫『満蒙問題』の歴史的構図』(東京：東京大学出版会、2013年)を参照されたい。
- (5) この点は、『満蒙』の発行母体となる満蒙文化協会の会員構成からも確認できる。即ち、同協会会員総数1353人中(法人会員を含む)、華中・華南の会員は上海9名、漢口3名、台湾5名のみとなっており(約1.26%)、9割近くが中国東北地域と内モンゴル在住会員となっている(『満蒙』第6号・1921年2月・74-83頁)。
- (6) 同記事項目は、第57冊より、掲載が『満蒙』本体から会員限定配布の「パンフレット」に移動している(「編輯後記」第57冊・1925年2月・167頁)。このため、一部の「パンフレット」しか所収出来ていない本稿底本からは、その後の内容が確認できなくなっている。本書357頁からの「附表」から、第57冊以降に「短信」形式記事が極端に姿を消すのはこのためで、「附表」利用において留意しておく必要がある。

- (7) 『満蒙』(第70冊・1926年2月・74頁)。このような編集方針変更の背景としては、『満蒙』発行母体である満蒙文化協会が、奉天、ハルビン、天津などに情報係を特設して、所謂「ファーストハンド」の情報を収集できる体制の確立があった(同前)。
- (8) なお、同企画では「南支那は主として上海、杭州、南京、鎮江、無錫、蘇州並びに青島」(第59冊・1925年4月・目次後2-3頁)との認識を示しており、本稿の地域区分からすれば、「華中」の範疇にある都市を「南支那」と認識していた。
- (9) 『満鉄調査時報』(1919年12月-31年8月)に掲載された「華中・華南」関係記事タイトルの一覧に関しては、別途『近代中国研究彙報』(東京：公益財団法人東洋文庫)第43号に掲載予定である。
- (10) 前掲拙稿、108-110頁。
- (11) 同索引に記載された記事は、満蒙文化協会を通じて閲覧することが可能だった。なお、満鉄の調査課においては、この各種情報の分類・整理事業がスタッフの重要な仕事のひとつとなっていた(井村哲郎『満鉄調査部：関係者の証言』東京：アジア経済研究所、1996年、4頁)。
- (12) この他に、日本「内地」の研究者からの寄稿も一定数を占めていた。この背景には、日本国内の「最新」の情報に対する要請に加えて、在「満洲」日本人の「内地」日本人の「満蒙」認識への違和感から(佐藤四郎「帝国議会と満蒙問題」第71冊・1926年3月・10頁、恵須園「わが満蒙視察者に与ふ」第133冊・1931年5月・1頁)、日本「内地」の認識如何を確認したいという意向が反映していると考えられる。
- (13) このような認識の背景には、「満洲」を中国の一部として明確に位置付ける認識があったことにも留意する必要がある(「満蒙(南満洲及東部蒙古)六万余方里の土地は決して日本の領地ではない」石川鉄雄「満蒙に於ける文化政策の提唱」第2冊・1920年・9頁)。しかし、中国東北地域在住日本人にとって、自らの保持する地域性に属する特権性を維持するためにも、中国一般とは異なる「満洲」の特殊性を押し出す必要にも迫られてもいた。ここに、「満洲」の文化的独自性の立論をモンゴルとの連繋から試みる(=「満蒙」認識の喚起)ことが始まることとなる所以の一つを見てとることができる。
- (14) この上海と大連の金融的連鎖をはじめとした、所謂「関内」経済と中国東北地域経済の連関については、久保亨『20世紀中国経済史論』(東京：汲古書院、2020年)第Ⅲ部第3章「日本の侵略前夜の東北経済——東北市場における中国品の動向を中心に」、安富歩『満洲国』の金融』(東京：創文社、1997年)序章を参照されたい。
- (15) その一方で、「満洲」経済の「華中」「華南」への影響や同地への経済進出に関するまとまった内容を持つ記事は、労働市場としての位置付け以外には確認できない。

このことは、「華中・華南」を「満洲」経済にとっての商品市場と見なしていく認識が薄かったことを示すものとなっている（但し、例外的な記事として、「南洋」進出の拠点として大連を位置付ける、難波静雄「仏領印度関税問題の解決と関東州の活用」第15冊・1922年・9-14頁がある）。「華中・華南」と中国東北地域は、前者から後者が一方的に影響を受けるというような認識となっていたのである。

- (16) このような「華中・華南」を異質と見なす「満蒙」日本人の視点と同様に、「華中・華南」側から「満蒙」を異質と見なす視角も存在することを示す記事も『満蒙』には掲載されている。1926年に数回に亘り掲載された、宇澄棲「華人K氏の満洲印象記滌沫録」は、その好例で、上海と大連の比較などを中心に、「満蒙」における日本側の有り様の諸相を批判的に相対化している。
- (17) この日中連携を追究する認識や言説の後退に関しては、前掲拙稿を参照されたい。
- (18) 満洲青年連盟に関しては、さしあたり、満洲青年聯盟史刊行委員会編『満洲青年聯盟史』（奉天：満洲青年聯盟史刊行委員会，1933年〔復刻・東京：原書房，1968年〕）、平野健一郎「満州事変前における在満日本人の動向：満州国性格形成の一要因」（東京：『国際政治』43号，1970年）を参照されたい。